

厚生労働科学研究費補助金（難治性疾患等政策研究事業（難治性疾患政策研究事業））
分担研究報告書

福祉サービス活用による就労支援シンポジウム開催

研究要旨

「難病の患者に対する医療等に関する法律」の成立と施行により、難病患者の支援制度は整備されてきたが、福祉的就労については活用されているとは言い難い。本研究の目的は、障害福祉の制度周知に効果的な普及法のひとつとして、地域で就労移行についてのシンポジウムを難病相談支援センターと共催し、同センターを中核とした地域の就労支援ネットワークの構築に寄与することである。研究初年度である今年度はシンポジウムの基本企画を作成し、佐賀県難病相談支援センターと共催し、シンポジウムを開催した。また先行して昨年度就労移行支援シンポジウムを開催した札幌実行委員会に対して、シンポジウムの企画・実行がその後のネットワークの構築の推進にどのように効果があるかをアンケート調査した。

< 研究分担者 >

深津 玲子 国立障害者リハビリテーションセンター 病院
糸山 泰人 国際医療福祉大学 副学長

< 研究協力者 >

伊藤たてお 日本難病・疾病団体協議会 (JPA) 理事参与
春名由一郎 障害者職業総合センター 主任研究員
堀込真理子 東京コロニー職能開発 所長

A. 研究目的

「難病の患者に対する医療等に関する法律」の成立と施行により、難病患者の支援制度は整備されてきたが、福祉的就労については活用されているとは言い難い。われわれ

は25～27年度に難病患者および全国の作業所を対象に大規模調査を行い、難病患者で作業所利用経験者はきわめて少なく、福祉的就労を「知らなかった」という回答が70%に及んだ（有効回答数1023）。本研究の目的は、障害福祉の制度周知に効果的な普及法のひとつとして、地域で就労移行についてのシンポジウムを難病相談支援センターと共催し、同センターを中核とした地域の就労支援ネットワークの構築に寄与することである。また同時に地域でのシンポジウム開催による効果を検証することである。

B. 研究方法

1) 難病のある人の就労移行支援に関するシンポジウムの開催；自治体の難病相談・支援センターと協力調整を行い、就労移行についてのシンポジウムを共催し、就労系福祉サービス制度周知の実践と地域の就労支援ネットワーク構築の促進を行う。

2) シンポジウムの効果調査；シンポジウム開催による制度の周知効果および就労支援ネットワークの変化について、講習会開催直後、半～1年後にアンケート調査を行う。シンポジウムのプログラムの基本的な枠組みは表1の通り。なお当研究では障害者総合支援法の対象となる332疾患を難病と定義する。

表1 シンポジウムの基本企画

福祉系就労支援研究から（深津）

労働・障害者雇用分野の研究から（春名）

パネルディスカッション

（糸山・堀込）

地域の支援機関（難病相談支援センター、ハローワーク、地域の事業所、当事者等）

C. 研究結果

1) 難病のある人の就労移行支援に関するシンポジウムの開催；佐賀県難病相談支援センターと共催で、平成29年1月29日に佐賀市において就労支援シンポジウムを開催した。参加者は71名であった。参加者の性別、年代等内訳については、図1に示した。また同シンポジウムの詳細については、参考資料として掲載したので、参照されたい。

2) シンポジウムの効果調査；先行して平成28年3月21日に札幌において開催した就労シンポジウムを研究班と共催した「札幌開催実行委員会」に対して、開催半年後のアンケート調査を行った。結果は表2に示した。

D. 考察

今回佐賀で共催した難病のある人の就労移行支援に関するシンポジウムについては札幌

とほぼ同様の基本企画でおこない、75%の出席者が良いと評価し、概ね好評と言える。出席者の年代は20～60歳代であり、とくに40・50歳代で半数を超えた。就労年齢の方が多く出席したことがわかる。出席者のバックグラウンドとしては、患者・家族が約半数であるが、企業関係、就労支援機関からの出席も多く、関心の高さを示す。同シンポジウムは当日佐賀ローカルニュース(NHK)、佐賀新聞(図2)で報道された。こういったマスコミの効果が現れるのかも含め、来年度再度アンケート調査を行う。次に先行して開催した札幌シンポジウムの半年後効果であるが、自分自身の意識や知識の変化は概ねあるが、就労移行に関する相談や新たな業務の増加には結びついていないようだ。引き続き地域の支援ネットワーク構築の促進のきっかけとなるようなシンポジウムのあり方について検討していく。

E. 結論

佐賀難病相談支援センターと共催し、就労移行についてのシンポジウムを行った。また昨年度開催した札幌シンポジウムを共催した札幌実行委員会に対して、半年後のアンケート調査を行った。難病のある人への就労移行支援についての関心は当事者・家族のみならず企業、就労支援機関でも高いことがうかがわれるが、シンポジウムを企画・実行することで地域の支援ネットワークの構築の促進に結びつけるためには、さらに検討が必要と考えられた。

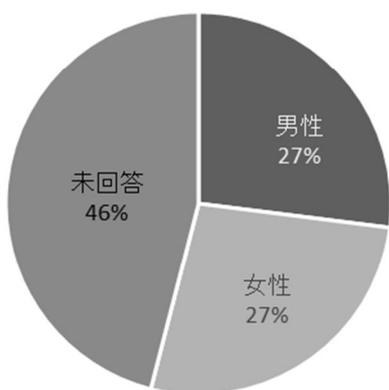
健康危険情報

- 特になし
- F. 研究発表
- 論文発表
無し
 - 学会発表
中村めぐみ 就労支援における福祉サービス活用の普及 第26回全国難病センター研究会 2016.11.5 東京

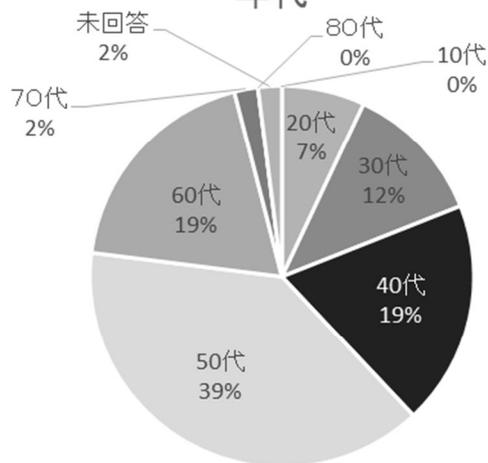
- 知的財産拳の出願・登録状況
無し
- 特許取得
無し
- 実用新案登録
無し
- その他
無し

図1：就労支援シンポジウム・佐賀 アンケート集計結果
参加人数 71名 アンケート有効回収率 73.3%

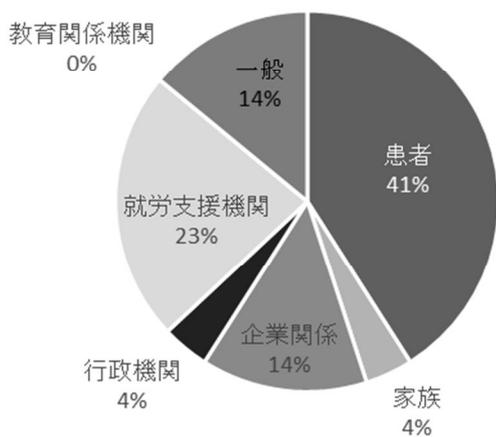
性別



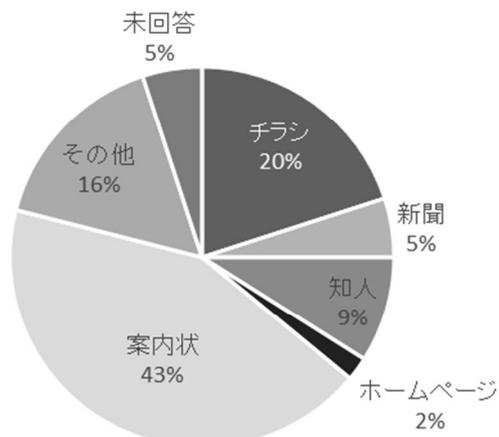
年代



難病センターとの関係



シンポジウムを知ったきっかけ



次項に続く

図1 続き

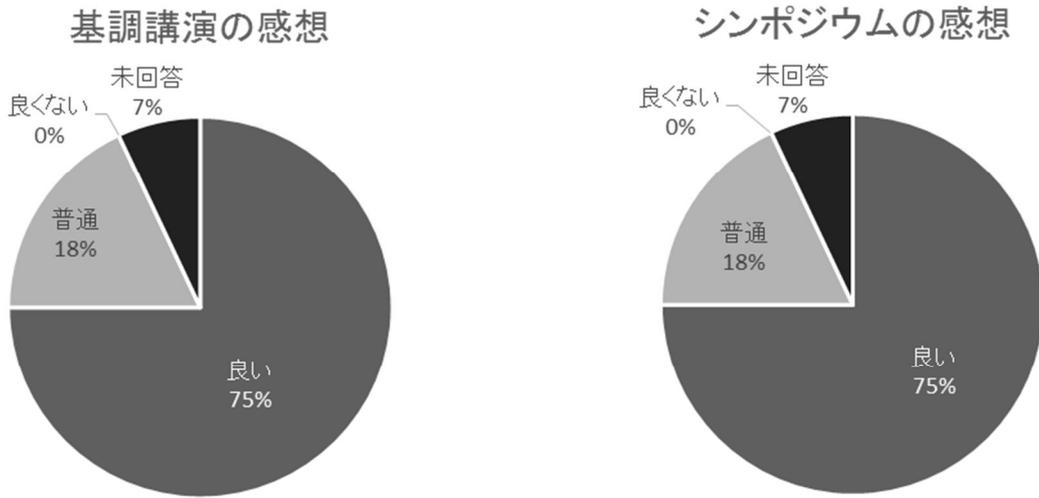


図2：佐賀新聞 2017.2.9 朝刊



表2 「難病のある人の福祉サービス活用による就労支援シンポジウム札幌」実行委員会
アンケート調査結果

1. あなたの職種をお答えください。

- 1)医療ソーシャルワーカー(社会福祉士)
- 2)地域包括支援センター社会福祉士
- 3)障がい者相談支援専門員
- 4)看護師 社会福祉士
- 5)事務職(社会福祉士)
- 6)事務職(社会福祉士)
- 7)患者支援団体役員
- 8)ソーシャルワーカー

2. シンポジウムの開催によって、あなたの福祉的就労の知識は増えましたか。

- 1)間違えなく増加しました。
- 2)増えました。
- 3)現場の感覚の通り、難病患者が福祉的就労につながっていないという実態が理解できました。今後そのような実態をどのように地域で変えていくかが課題。
- 4)広い意味での知識をえることはできたが、直接実践に役立つかといえば、自己学習などが必要。引き出しがふえたことは確か。
- 5)はい、実際に福祉的就労を利用されている当事者の方、事業者の方、研究者などの方からお話を聞くことができ、具体的な事例を知ることができましたし、制度についても知ることができました。
- 6)はい、まずはどこに問い合わせたらよいものか、その知識を得ることができました。
- 7)大変多くのことを学びました。
- 8)ハローワークのAさんやA型事業所のBさんのご講演で、病院の外での支援体制についての理解が深まりました。

3. シンポジウムの開催によって、どのような成果があったと感じていますか。

- 1)自分自身の意識が高まった事で、就労を視野に入れた相談を受ける事に繋がっている。
- 2)ネットワーク構築。
- 3)特に医療関係者に障害福祉サービスを理解してもらうきっかけになったと感じています。今後医療と障害福祉の密接な連携ができる機会が増えていくことを期待しています。
- 4)多職種が関心をもつ機会となった
- 5)市内、道内で事業所を運営している方々と知り合うことができたので、必要な場合には気軽に相談できるようになると期待しています。
- 6)就労の機会の確保、社会参加の重要性について改めて考え直す機会となりました。
- 7)難病患者を取り巻く多職種の方々と知り合いになり、同時に多くの有効な社会資源とそ

表2 続き

の活用について知識を得ることができました。

8)堀越先生のご講演で、ソーシャルワーカーの外来業務の重要性を再認識することができました。

4. シンポジウム開催後、あなたの仕事上で福祉的就労に関する相談や業務は増えましたか。

1)今までなかったですが、数件の相談が入っております。

2)現在は高齢者領域の業務であるため、福祉的就労に関する業務にはあまり関与しない。

3)増えていない。

4)具体的に就労に関する相談を受ける機会がなかった。

5)現在は相談援助職ではないので、具体的な相談を受けるわけではないのですが、ここ数ヶ月で数人の若い難病患者さんから就労の悩みを打ち明けられました。難病患者さんに関しては、福祉的就労を希望される方はほとんどなく、配慮を受けながら一般企業等で働き、生活できるだけの給料が欲しいとの希望がほとんどです。昔に比べると福祉的就労の場が広がって選択肢が増えているのは嬉しいと思いますが、福祉的就労に結びついた例は残念ながらあまり聞かないように思います。

6)これまで敬遠していたともいえる就労支援に関する相談により積極的にのることができるようになりました。ただ、医療的ケアを必要とする方々の就労は未だ実現には程遠い位置にあります。就労を希望する人にその機会を平等に与えられる社会とするためにはまだまだ不足している部分があると思いました。

7)関係者からの問い合わせや、講演、執筆などの内容を豊富にすることができました。また、患者や家族の方々へのアドバイスに良い方向での変化が出たと思います。

8)変化はありません。外来ソーシャルワークが根付いている病院ですので、随時、相談を受け付けております。

5. シンポジウム開催後、新たなスキルを実践していますか。

1)スキルとまでは行かないが、新しい知識や情報を取り入れながら実践している。

2)若年認知症支援での活用の検討。アクティブシニアの活躍の場の創造のための参考。

3)特にない。

4)していません。

5)難病患者さんが望む仕事と、福祉的就労の仕事内容・給与にミスマッチが生じているように思うので、もっとデスクワークや頭脳労働を必要とする仕事を受注できないかと考え、あちこちに打診したり話を聞いたりしています。今のところ、単純労働の仕事は時々見つかるのですが、デスクワークに絞るとなかなか仕事の拡大は難しいと実感しています。

6)事務局メンバーで開催している勉強会でも福祉的就労を取り上げ、より一層学びを皆で深めました。今後はそれらの知識を活用しながら、医療的ケアを必要としている方々の社会参加へ繋げていきたいと思います。

7)他の職種の方々との連携に役立っていると思います。

8)患者さんやご家族の就労状況について、詳しくアセスメントするように心がけています。